

# 化学教育 徒然草



## — すぐそばにいること —

KASAI Kayoko

笠井香代子

宮城教育大学 教授  
東北支部 副支部長・化学教育協議会議長 (2019~2020 年度)



巻頭言

昨年11月末に研究室の引越しがあった。建物の改修工事のため、約1年間仮移転先で過ごす予定である。旧研究室では、教授室と実験室をあわせてマンションの2LDK くらいの60m<sup>2</sup>で、私は主に教授室で、卒論生・大学院生などの6名のメンバーは廊下をはさんで向かいの実験室で研究活動をしていた。仮移転先ではワンルームマンションくらいの26m<sup>2</sup>と以前の半分にも満たず、ここに7名がひしめき合って研究活動をしている。以前は全員の個人机があったが、ここではそれもない。6名のメンバーはLDKにあるような大きな机を共有で使用し、私も個人机ではなく、2段引出しの脇机にPCを置いて机のように使用している。この共有機で打合せや研究室ゼミなども行うのだが、いちどゼミ中に工事が始まり、急遽オープンカフェのような共有スペースで行ったことがあった。カフェのような、という聞こえがいいが、要するに廊下の延長である。しばしば通りかかる教員や学生の視線を感じながらゼミを行うのは、それはそれで面白いと前向きに捉えている。

引越し祝いパーティーも終わり、研究活動もおおむね元通りに戻ったのだが、むしろこの狭い仮移転先の方が居心地がよいことに気がついた。何か用事があればすぐそばにいて、気軽に話ができる。当研究室では有機化合物や錯体の結晶を作成しているが、きれいな結晶ができ、顕微鏡で観て嬉しそうな声が挙がると、「見て」、「見せて」とお互いに見せ合っている。同僚や先輩や指導者がすぐそばにいたことが、教育研究にとって重要であることをあらためて認識した。

さて、子どもにとって最初に出会う学問の指導者は小学校の先生である。中学校や高等学校とちがい、小学校では基本的に全教科を担当の先生が教えており、登校から下校まで、一日中子どもたちのすぐそばにいる。折しも2019年ノーベル化学賞を受賞された吉野彰先生が化学に興味を持つようになったのは、小学校の担任の先生に「ロウソクの科学」をすすめられたのがきっかけであったそうである。今後の化学の発展のためには、この恩師のように化学に興味を持ち、子どもたちに化学の魅力を伝えられる小学校の先生が増えることが必要である。

[連絡先]

980-0845 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉149 (勤務先)